美少女エクソシストの聖水？
むしろご褒美です！
BEGINNING
千夜詠
表紙イラスト◎アライノブ
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『美少女エクソシストの消えない記憶』
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『美少女エクソシストの聖水？　むしろご褒美です！』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

美少女エクソシストの聖水？むしろご褒美です！
BEGINNING
千夜詠
表紙／アライノブ
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

阿澄陽菜（あすみひな）

ふわっとした柔らかい金髪に碧眼、猫耳をもつ少女。人にあだなす存在である魔物を討ち払うエクソシスト (祓魔師) としての高い能力を有する。

阿澄瑠菜（るな）

銀色の長髪に赤眼、猫耳の少女で陽菜の双子の妹。かつては陽菜とコンビを組んで祓魔師として活躍していた。

災討華実（さいとうかみ）

悪魔の間で最強のエクソシストとして恐れられる美少女。幼い頃に陽菜、瑠菜と出会い、ある事件に巻き込まれてしまう。

災討志奈子（しなこ）

華実の母親にして、祓魔師の家系として代々続く災討家の中でも、特に強力な法術の使い手として教会内で一目置かれる美女。

『エビフにゃー始めました』

カフェの窓に内側から貼られた告知は表通りから一番目立つ場所にあった。

また何かのボケなのかと、ブレザーの制服を着た武偉（たけい）と璃羽（りう）の幼馴染みコンビは反応に迷った。

丁度裏手にあたるテーブルに座って、少年は見なかったことにする。将来はいい男になりそうな、洗いざらしの黒髪をした、年上なら可愛いと感じる容姿である。

明るい金髪のツインテールで、ちょっと気の強そうな小柄な少女もまたそれに準じようとしたが、

「いらっしゃいませですにゃ」

「何ですか、これは陽菜（ひな）さん！」

やはり我慢できずにツッコミを入れた。愛くるしい容姿をした猫耳店長はきょとんとする。

これは放課後、祓魔（ふつま）部の今後の活動方針の話し合いにカフェ「ひにゃるにゃ」にやってきた時の些細な一時のことだ。

晩春から初夏にかけての頃、福山（ふくやま）武偉は、欲望のままに人にあだなす異形の存在、悪魔に狙われ、そしてエクソシストの少女と出会った。彼女の名は災討華実（さいとうかみ）といって、悪魔祓いのスペシャリストであるエクソシストの中でも最強とまで呼ばれる存在だった。月明か

りが照らした夜景のような艶やかな長いストレート髪をした絶世の美少女。黙っていれば、であるが。

少年の幼馴染みである悠木璃羽もまた華実に救われた一人だ。そんな縁あってか、三人は今、花蛇学園祓魔部に所属している。

「ああ、これのことですかにゃ」

淡く輝くエメラルドのような大きな瞳を寂しげに微かに細める猫耳をしたカフェの店長兼オーナー。阿澄陽菜という。彼女はエクソシスト、学園教師、喫茶店の経営者という異例の経歴を持つ女性で、華実とは旧知の間柄であった。

ふわふわした癖毛の金髪で、チビッコな体格であるが、実際はけっこうお姉さんだ。不思議の国のアリスを思わせるメルヘンなウエイトレス姿が非常によく似合っている。

「エビ……フにゃーって……」

たぶんエビフライのことだと璃羽も分かっている。だが何故にエビフライ？

「まあ言いたいことは分かるですにゃ。……これはただ一人に知ってもらう為、にゃので……」

また寂しげな表情を見せる陽菜。悲しみに満ちたような瞳に、武偉は心配を込めた疑問形で声をかける。

「陽菜……さん？」

彼女は辛さを堪えるような微笑みを見せた。
「そうですね。華実ちゃんが来るまでまだ少し時間がありそうですから、聞いてくれますですかにゃ」
それはただ一途に大好きな存在を守ろうとした少女の物語だった。

*

列を成して下校する小等部の子供達の前に突然現れたのは作業服を着た二十代も後半といった男だった。
夏休み直前の炎天下で、住宅街の通学路にはアスファルトの上に陽炎さえ現れている。
確かにこんな日には、視点の定まらぬ少し危なげな者の一人くらいいてもおかしくはなかった。ただ彼は、それを通り越して、狂人そのもののように見える。
列の先頭にいた上級生の男の子は警戒して止まった。少しだけ後ろを庇うように手を広げている。
「へ、へへぇぇ、お前達、美味そうだなァ……。特に……」
男のぎろっと飛び出したような瞳が捉えたのは、後ろの方にいた夜闇が月明かりに照らされたような幻想的な濃紺色の髪を背中まで伸ばした小さな女の子。気の強そうにも見えるルビーのような輝いた瞳をした彼女は、黒いフリルのついたワンピースを着ていて、集団の中にいてもかなり目立つ美少女だった。

体格からすれば、まだ低学年であろう。キッと男を睨み返すが、膝の震えが見て取れる。
「ひゃひゃァあああ！　食べたいぃいいい！　切り刻んで、血ぃ啜って、柔らかそうな太股しゃぶって、食いついて……」
刃渡りの長いナイフを男は取り出した。
誰が見ても危険そうな輩だった。だからその瞬間、子供達はもうどうしようもなく混乱して逃げ出した。
キャァアアア――ッ！
悲鳴が響きわたる。近くにいた大人達が気付く。主婦が子供達に駆け寄って避難させる。
勇敢な中年男性が男に向かった。
シュパッ！　ナイフで肩が切られて、仰け反って男性は倒れた。
直ぐに狂った男を遠巻きに囲うように人だかりができる。
誰かが叫んだ。警察を呼べ。
もう市民にできるのはそれしかない。凶刃を振りかざす男の発する強烈な殺意に大人すら呑み込まれている最中、一人の少女が逃げ遅れて、震えながら立ち尽くしていた。
濃紺色の髪の女の子だ。迫ってくる狂人を前に、気丈にも泣かなかった。だが顔面は蒼白としている。
少女には分かっていた。誰もが思うおかしさだけでない、この男の中に入り込んだもっ

と絶対的な神の敵の存在のあることに。
だから本能的に恐怖してしまう。動けなくなってしまう。分かってしまうがゆえに。
男の唇から涎が漏れた。見下ろしてくる。幼い心が恐怖に押しつぶされそうになって、生温かいものが股間を流れていった。
「さ、さあっ、少しずつ、俺の胃袋に押し込んでやるぅうう！」
ナイフが振りかぶられた。人々が目を覆う。友達が泣き叫んだ。
少女は……華実は、強すぎる恐怖に瞳を閉じることさえできなかった。
その時、
にゃァあああああああァぁっ！
鳴き声が響いた。
狂人も、周りの人達も辺りを見回す。強烈な憎悪と真っ直ぐな正義を濃厚に込められた猫の咆哮。
「な、なんだ？　い、嫌な鳴き声……。くそっ、どこにいやがる」
苛立つ男と対照的に、少女からは恐怖が消えた。包み込んでくれるような温かさに安心感が溢れてくる。
「天が呼ぶ、地が呼ぶ、華実ちゃんが呼ぶ。悪魔を倒せと猫が鳴く」
その声は、近くのマンションの屋上からだった。猫？　いや人影が二つあった。

しい存在。疑いたくないって知らず思ってしまうんだよ」

勇介に悪魔が化けているわけではない。勇介の中に悪魔がいて、とりつかれているのとも違った。共存、いや、共犯関係にあるのだと直ぐに分かる。つまり自分の意思で己の体内に悪魔を飼っているのだ。

「な、何故、エクソシストの貴方が……、ヒ……っ」

異常に伸びた青年の舌が、ぺちゃぺちゃと首筋を舐め回してくる。ゾッと悪寒を感じる心と別に、乳首と肉芽に甘い痺れが走った。

「俺とこいつの能力を合わせれば、アンタを自分の物にできるって気付いちまったのさ。俺は昔からアンタに憧れてたんだぜ。そしてこいつも、俺を利用すれば最も危険な存在を排除できるって思ったんだろうよ」

こいつ、とはすなわち勇介の中に潜む悪魔のことであろう。そして悪魔が最も危険視するのは愛娘のことに違いなかった。

「そ、そんなこと、させな……、はぁっ！」

乱暴に熟れた胸の果肉が掴まれる。力強く食い込むように沈み込んでくる五指から、強烈な肉悦の刺激を感じて、満足に動けぬ体が快感に震えてしまう。異常なまでに過敏になっていた。だらしなく開いてしまう唇を何とか食い縛る。

「無駄、無駄……。直ぐにでも姦っちまいところを我慢して、こんなになるまで慎重に準

ちょっと読み
え試し
ここから
スタート!

備したんだ」
「な……っ！　まさか……」
「昼間は双子もいねえから、俺がずっと昼食を作ってやっただろ。それにさ、入れておいたんだよ、悪魔を宿した俺のザーメンを」
狂気じみた瞳が心底嬉しそうに開かれる。強烈な吐き気を覚えても、肉体の発情の反応が治まってはくれなかった。
「あはぁ、興奮したぜ。知ってたか、アンタが食事をする唇を見ながら、俺はチンポを硬くしてたんだ。こいつの腐った精液は、徐々にアンタの体を蝕んで、もう起き上がることもできねえだろ。更に……」
悪魔を身に宿した男は、志奈子の下半身の方へと移動する。閉じていた膝を両手で掴まれ、グイッと大きく左右に広げられてしまう。
「いやぁ……っ」
湯気立つほどに蒸れた股間に、勇介が顔を寄せて、牝の全てを覗かれた。焦がすようないやらしい視線が物理的な刺激を与えるほどに凝視してくる。
「うへえ、これが志奈子さんの、オマ〇コ……。くくっ、ドスケベ汁でぐっしょり濡れてるぜ」
「そんな……嘘、嘘です」

「自分で分かってんだろ。体の自由が利かなくなるのと比例して、性欲が異常に増してくるのを。そいつがもう一つの効果さ」

美麗な顔を顰め、堪らず横を向く。間近ではしたなく盛りきった女を見られ、強い羞恥を感じてしまう。志奈子は焦りを覚えた。エクソシストはマゾヒズムを持った与え手を責めて発せられる魔性の力を得る。だが逆に自分が責められる側に立った時、祓魔の力は失われてしまうのだ。

（このままでは……、気をしっかり持って……）

たとえ毒液の効果であったとしても、羞恥の刺激に感じてしまえば体内魔力を自由に扱えなくなってしまう。

「ふ、ふん、女の秘部がそんなに珍しいの、この……」

「この、何だってんだ？　無駄無駄。きつい口調で責め手であろうとしても、本性は変えられねえさ。ほらっ」

ぐちゅっ！　盛りついて膨らんだ肉ビラを摘まれ、そこに力が込められると、痺れが尻孔にまで伝ってだらしなく唇が開いた。

「ふあっ……、や、やめ……っ」

「くくっ、責め手なら、ここはもっと気持ちよくさせるように命じるところだろ？　ほらほら」

ぐちょぐちょと濡れた花弁を指で左右に広げられる。
「か、勝手なことを……させたくない、だけ……」
「そうかい？　奥まで丸見えで、物欲しそうに膣孔がヒクついやがる。おお、どんどん溢れてきやがる。アンタの……マゾ汁が……」
引き千切られるほどにきつく摘みあげられると、肉体がもっともっとと激しい刺激を求めてしまう。自由の利かぬ全身を震えさせ、翻弄されまいと一度唇を噛んだ。
「マ、マゾだなんて……、精液の影響が、こ、こんな……」
「違うね。こいつは単に性欲を増してるだけさ。つまり、アンタはこんな風にマ〇コを弄ばれたがってんだよ」
「ち、違っ……、私はエクソシスト……。こんなこと……、ヒ……っ！」
包皮を捲り上げた過敏な肉芽が男の指先に捏ね回される。優しさの欠片もないように乱暴に摘み転がされ、痛みに涙が滲んできた。
「手と足が満足に動けず、男に弄ばれて口惜しいか？」
「く……」
性的に嬲られている。そう思った時点で、責め手としては失格であった。相手のペースにさせない為にも、ここは下手糞と詰って、させる側に立たなければならない。だが気持ちがどうしても被虐へと傾倒してしまう。

「恥ずかしい恰好になった時から興奮してたんだろマゾ豚」
過敏な肉芽への攻めが、不意に軽く摩る程度の優しさになって、ただネチネチと弄られていく。
「そ、そんなことは……」
刺激が鈍くなった途端、もどかしさが湧いてきた。
「みっともなく股を開いたオマ〇コ丸見せの姿を俺に見られて、感じてたはずだ」
「違……っ、はあ……」
むず痒さに似た疼きが増大してしまう。
「欲求不満だったんだろ？　知ってるぜ、俺がここに来てから、アンタと旦那が一緒の布団で寝たのは一度だけ」
「煉一さんは忙しくて、わ、私も体調が……」
「セックスの後、自分で慰めてたよな」
ビクッと体が震えた。事実に眉根を寄せて、見られていたことと、あさましい自分に羞恥する。実際、満足できていないのは、その夜だけではなかった。ここ何年か、徐々に夫婦の性の営みは回数が減っていき、彼の情熱も失われている。それだけではなく、求めている何かが足りなかった。
志奈子は無言のまま辛そうに横に顔を背けた。

「まあ、しょうがねえよな。所詮、エクソシスト同士で上手くいくはずねえんだ」
「あ、貴方に夫婦の何が……」
「分かるさ。互いに遠慮がちなセックスしかしてねえんだろ？　本当はアンタだって知ってるはずさ、災討さんが、アンタの旦那が、与え手である他の女には、激しく責めたてているってこと」
「う……っ」
　嫉妬心が湧かないはずはなかった。だがそれは責め手であるエクソシストとしては仕方がないことだと理解している。
「今だって、出張先で他の女を泣かせてるんだろうな」
「や、やめて……」
「それを知っていて、羨ましいんだろ、アンタだって、責めて欲しいって……」
「やめなさい……、ふぁ……ぁぁ……」
　僅かに接触する程度に、指先で肉芽が掻かれ続けていた。継続する軽い刺激に、じわじわと欲求が募らされてしまう。
「でも、エクソシストの嫁相手に、力を失わせるわけにはいかねえ。だからアンタら夫婦は我慢してたんだ」
「ち、違う……っ、はっ……ハア……」

僅かに上げた顔に、瞳が怪しく光る。
たじろぎを微かに見せる黒い悪魔。
「フ、フン、強ガル牝トイウノモ悪クナイ」
甲虫のような体の関節部から、無数に、やはりコールタール色の長太い蚯蚓のような触手が伸びてきた。
艶やかな健康的な肌色をした少女の四肢に巻きつき、股間が大きく左右に開かれる。
「ぅく……っ」
強気な表情が強張り、嫌悪を隠せなかった。数本の触手がスカートと襟首から内側に潜り込んできて、フリフリの可愛らしいコスチュームにいやらしく蠢く様子が浮かび上がる。
胸元から腹部の柔肌が直接ヌメヌメした感触に摩られ、ゾゾッと背筋に震えが走った。
(気持ち悪い……、でも……)
いやらしい性の対象となって、いいように嬲られる意識に被虐が直ぐに目覚めさせられる。ノーブラの愛らしい乳首が違和感に痺れるほどに勃って、スケベな性感帯に変わった。大きく広げられた股間を包むローライズの白いショーツの内側では、徐々に熱が篭ってしまう。
瑠菜は自分ではっきりと自覚しているほどのドMであった。肉体の芯から被虐の魔性が膨れ上がってきている。

えっちシーン試し読み
ここから
スタート!

だが、それは彼女にとって悪いことではない。

（も、もっと、るにゃを虐めて……力を……）

半魔の特別な存在である彼女は、この被虐の一面を自身の人である部分に任せてある。そしてその湧き起こる魔性の力は決して他者には渡さない。全てもう一人の自分、悪魔の片面が吸い取り力へと変えてしまうのだ。責められて感じれば感じるほど、強くなれる。

そうとは知らず、悪魔はあどけなさの残る無垢そうな肢体が牝の反応を示していくことに興奮していた。

ベリベリ、と魔法少女のコスチュームが内側から簡単に破られていく。

「ヒっ……、こ、この……っ」

大事な変身コスチュームがあっけなくボロキレのようにされて、胸元の肝心な部分が露になった。

成熟未満のような奥ゆかしい隆起の乳房。ささやかながら確かな膨らみで、女になろうとする途上のようなそこから、健気な牝の主張が醸し出され、男の背徳的な興奮を呼んでいく。ツンと勃った乳首と頬を羞恥に染めた表情は、色香に溢れていた。

「み、見るにゃァ……」

半分悪魔の血を持った瑠菜にとっては、異形の存在が相手とはいえ、人間同士のように視線が気になる。加えて、

「るにゃ……」
動けぬ姉が顔だけをこちらに向けて、妹が今にも陵辱される瞬間を見詰めているのだ。その表情が心配そうであるほど、自分の恥ずかしい恰好を意識してしまう。この羞恥が、被虐の魔性を高めると解っていても、掴まったままの腕で隠したくなった。
「肉体ノ内側カラ熱クナッテ、感ジテルナ……。エクソシストノクセニ、トンダマゾ体質トミエル」
悪魔の赤い瞳が桃色の乳首に集中し、じりじりと焼かれるような物理的な熱さえ感じてしまう。敵対者の姦計によって、嬲り者にされたこともあるそこだが、羞恥に慣れることはなかった。恥ずかしいと思うがゆえに、秘芯は痺れてしまうのだ。
コールタールの顔がニタニタと笑っている。
「ドレ、何処マデ変態ナマゾ牝カ、試シテヤロウカ」
足の付け根に巻きついた触手が下に引かれ、反対に足首に巻きついたそれは吊り上げられる。爪先は、お尻の高さを越えて、骨が軋む音を立てていった。
「うぐぅううっ、ひ、引き裂かれ……っ」
拷問の鋭い苦痛を感じながら、ワレメからじわっと溢れ出した淫蜜が白いショーツに濡れ染みを作っていく。
酷いことをされるほどに、マゾの肉体は確かに快感を覚え、湿って張り付いたクロッチ

に肉裂の形状がはっきりと浮かんでいった。
「大シタ変態ブリダナ。コノ真性ノ、マゾ猫メ」
苦痛と揶揄する言葉に喘ぐ。脂汗を掻き、濃厚な秘粘膜と牝蜜の香りが、ムンと蒸れて放たれる。
「はあ、はあ、ま、まだまだにゃ……。この位で……」
「ソウカ、ソウカ、マゾ牝ニハ、軽イ前戯デアッタ。デハ、コレデ……」
闇色の魔法陣が瑠菜の真下に描かれ、そこから現れたものにぎょっと瞳を見開いた。
「お、奥様……」
無数の大蛇のようなやたら長い男根を敷き詰めて作られた生々しい肌色のベッド。そこに全裸で仰向けに寝かされている志奈子がいる。
大の字に四肢が投げ出され、手首と足首をペニスで巻かれた枷が施されていた。やつれた表情に虚ろな瞳で、感情は希薄であるように見える。生温かい陰茎の熱に逆上せているようでもあった。
「ああ、瑠菜……、そんなとこに、いたの……。はあ、私……今、とっても気分がいいのよ。ふあ、ァ……っ、いい……」
背中で絡み合いながら蠢く幾百もの肉棒の動きに、志奈子は陶酔し、甘ったるい吐息を吐いている。

「そんにゃ……、酷いですにゃ……」
動けぬ金髪少女も貞淑な女主人の変わり果てた姿に眉根を寄せる。
「うぐ……、き、キサマっ、奥様ににゃにをっ！」
「心ト牝ノ本能ヲ解放シテヤッタダケノコト。イイ子ニシテイレバ、オ前モ、俺ノ愛玩動物ニシテヤル」
「ふざけるにゃ！　キサマは、一度殺すだけでは足りにゃい」
「今ノウチニ吼エテイロ。ソラ……」
二本の触手が千切れ、汗ばんだ肢体から濃厚な牝の淫気を放った人妻の胸の巨果実に這いよった。触手の一方の端がたわわに柔らかく揺れるその頂、発情しきって突起した乳首に吸い付く。
「んはァ、志奈子のだらしないオッパイ、くちゅくちゅしてぇ……」
貞淑ないつもの顔とは違う恩人の姿に、瑠菜は堪らず視線を逸らす。とても見てはいられない。悔しさを滲ませ、牙を噛んだその時、
ぐぶっ！　ぬぶぶっっ！　引き裂かれるような痛みが、尻谷の中心に走った。
「にゃヒっ！　お尻っ……」
志奈子の乳首に張り付いた二本の触手が伸びてきて、下着の脇から銀髪少女のアナル孔を穿り返してきた。螺旋を描くように二本は巻きつきあいながら、直腸を抉り込んでくる。

「くっ……、おにゃか……、は、張って……」
股間が引き裂かれる激痛に、繊細な内臓の粘膜が同時に苛まれ、小柄な肉体を震わせる。それでも、これまでの戦いで被虐の癖を擦りこまれてきた牝芯はジーンと甘く痺れ、勝手に唇が開き、だらしなく涎を漏らしてしまう。
「ケツ穴掘ラレテ、感ジルカ、変態猫メ」
背を仰け反らせるようにして、脳髄まで深く届く悦に、瑠菜の表情は苦悶から愉悦に蕩けた。
「るにゃ……」
そんな様子を信頼しあった双子の姉が見詰めている。心配してくれる瞳の中に、何処か蔑みのようなものを勝手に感じてしまい、
「あ、ァ……、ひにゃ……、み、みにゃいで……、ハア、ハア……」
羞恥は、更にマゾヒズムを燃え上がらせてしまう。息遣いはより深く、切なく乱れ、あからさまな発情を全身で表し、被虐の悦汗を滲ませた。
「クク……、一人デ、気分ヲ出シヤガッテ……、オ楽シミハ、コレカラダ」
ヌブっ、ズプっ、ぬっぷ、ぬっぷ……っ！　肉棒に拘束された志奈子の、ダラダラと淫蜜を垂れ流している股間。ヌラヌラと濡れそぼった肉ビラは赤く充血しきって膨らみ、そこに、数本の肉棒が割り込んでいく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/